学会の印象

第6回世界乳幼児精神保健学会
(World Association for Infant Mental Health, WAIMH)

■1996.7.25～27.　於フィンランド／タンペレ

小林隆児（東海大学健康科学部）

フィンランドへの直行便が運悪く確保できず，コペンハーゲン経由でヘルシンキに到着した時には白夜の国もさすがに夜の気配を感じさせていた。会場のあるムーミン生誕の地タンペレ Tampere 市にはその後約30分間の飛行機の旅が残っていた。出発の前日遅くまで発表のためのビデオ編集に没頭していた身として少々こたえる旅であったが，現地では森と湖に囲まれた自然が少しずつ疲れた身を癒やしてくれた。

WAIPAD（世界乳幼児精神医学会）が発展的に統合されて発足した世界乳幼児精神保健学会（WAIMH）であったが，今回は7月25日から28日までの4日間開催され，参加者名簿記載によれば45カ国から969名の参加者があった。前日の24日には夕方から多くのワークショップが開催されていたが，その前に診断分類に関するワークショップも企画されていた。筆者は残念ながら当日の夜に現地に到着したため，このワークショップには参加できなかった。参加された渡辺久子女史によればとても面白かったそうである。乳幼児臨床の世界で従来の臨床診断の枠組みを基本にして考えることについての多くの疑問が提起され，子どもの病態を固定的にとらえず子どもを関係性の中でもっと柔軟にとらえて臨床にかかわることの重要性が指摘され，これまでの枠組みを踏襲しようとする人々との間でかなり議論は白熱したという。

25日からは毎朝1時間，本学会の指導的立場にある著名な学者の講演が企画されていた。テーマと講師は，「治療介入の諸理論」(Stern, D.)，「母親・乳幼児治療の技法」(Cramer, B.)，「治療介入の評価と追跡研究」(Fonagy, P.)，「リスクをもった家族と乳幼児の治療介入」(Osofsky, J.D.) であった。

Stern は母親・乳幼児精神療法の蓄積の中からこれまでの種々の治療技法を越えた治療介入の理論化を語っていた。しかし，彼の講演は非常にわかりづらくほとんど頭がついていかなかった。自分の頭の悪さを嘆いたが，英国に数年間留学している某女史もほとんどわからなかったという感想を述べていた。彼の話には聴衆に対するサービス精神が感じられないのは非常に残念なことであった。これまで彼の理論を自分なりに学んできていたが，彼の臨床感覚とどこかでつながっているのではないかという思いが少し頭の中をよぎったりしていた。

Cramer は母親・乳幼児精神療法をいかにして科学的に検証していくかという視点から克明に治療過程の変化を数量化しわれわれに提示していた。ビデオを駆使し，図式化し，わかりやすく語っていた。今日の生物学的志向の強い精神医学の中では，精神療法の世界もその影響のもとに，その科学性をいかに高めていくかということが重要な課題となっているのであろう。

最後の Osofsky の講演には出席できなかったが，Fonagy の講演はとてもわかりやすく多くの人に好評であった。Anna Freud Center の所長でもある彼は，自分の研究実践よりも最近の早期介入の知見を総括的に解説し，とくに後半では青年期の行動障害の予防をどうすればよいかという立場から乳幼児期の早期介入の重要性を強調していた。行動障害にみられる共感性の障害をどうしたら予防できるかということであった。そのためには彼らに心の理論 theory of mind を獲得できるようにしていかなくてはならないが，その際には母子間での安定した愛着関係が不可欠であることが幾度となく語られていた。養育者が子どもの心のあり方を観察する能力が大切で，そのことによって養育者は子どもも自らの意志をもつ存在であるとみなすようになり，それとともに愛着関係が深まり，子どもはその養育者の心のあり方を頼りにして次第に他者の心の存在に気づき，それが自らの心の気づきにつながっていくというのである。このようなことをわかりやすく図示して説明してくれた。わが国では心の理論が発達障害臨床の世界の鍵概念であるかのような錯覚に陥ってしまうよ

うな状況であるが，心の理論の問題は精神保健の世界において実に広がりをもつ鍵概念であることを感じさせるとともに，彼が解説してくれた内容は子どもの臨床に関与するわれわれにとって納得のいく内容でもあった。講演終了後，聴衆に講演レジュメを希望する人には送付するからと呼びかけていたが，こうしたサービス精神も手伝って講演終了後，多くの聴衆が壇上にあがって握手を求めていたのは印象的であった。

毎日多くの会場に分かれて熱心な討議がなされていたが，何にポイントを絞って聴いたらいいのか十分に吟味しないままに会場をうろうろしていたというのが正直なところであった。筆者は45分間のビデオセッションで発表したために，その準備の疲れが最後まで残り，時差ボケも手伝ってこのような貧弱な印象記になってしまった。お許しを願いたい。次回4年後はモントリオールで開催されるという。今から4年後が待ち遠しい。

第4回多文化間精神医学会ワークショップ

■1996.9.21.　於横浜／市民文化会館関内ホール

桑山紀彦（上山病院，山形大学医学部精神科）

第4回多文化間精神医学会は横浜で開かれた。

この学会が在日，対日の外国人のメンタルヘルスや在外邦人の精神面でのケアに力を入れていることを考えると，横浜という地は非常に「多文化的」であると言えよう。そんな地の利を得つつ，今回の具体的なワークショップ（以下WS）は「多民族間葛藤と精神」と題して行われ，なぜ人は憎み合い戦争をするのかといったところに焦点を当ててシンポジウムが構成された。

残念ながら中屋敷（リビチ）郁子さんは調子が思わしくなく出席できなかったが，変わりに横浜市立大の山田和夫先生がこれまでの旧ユーゴスラビアの状況を郁子さんを軸として説明した。それに続き，「森の回廊」で大宅壮一ノンフィクション賞を獲得したアジアプレスの吉田敏浩さんがビルマ（あえてビルマ）のカレン族のゲリラとしての生活と，それに振り回されていく周辺住民のことを発表した。次いで山形から桑山がAMDA（アジア医師連絡協議）というNGOの一員として出入りしているカンボジアのことを発表した。主に帰還してくるカンボジアの帰還難民のことであったが，そのほかにもポルポト派の将軍クラスと少年兵の風景構成法の違いなどについて発表した。そして総論として東京都精神医学総合研究所の皆川邦直先生が「個と国家の関係の変遷と個の確立：戦争抑止をめぐって」と題して人間の成長過程やエゴ，そして精神分析的な「戦いと人間の心」というテーマに迫った。

結局，なぜ人は戦いに参加していかねばならないのかという根元的な部分に突っ込んでいく状況ではあったが，実際に，戦争の抑止力は人間の精神の中のどのメカニズムに触れることなのかという点についてはやはり非常に明確化しにくい部分であったようだ。しかし「分離と固体化」という課題が民主主義を生み出し，ひいては戦争の抑止に役立つという点では，皆の合意をみたような気がした。

このシンポジウムに先行して特別講演が芥川賞作家，辺見庸氏によって行われた。

氏のテーマは「情報化社会と人間身体～オプティマムはあるのか」というものであったが，当初この題名から何が引き出されてくるのか若干わかりにくいと危惧されたが，実際の講演に入ってみると，実にわかりやすく，また氏の課題とするところが非常に「社会精神医学」に通じるところがあり，実に有意義な講演であった。オプティマム，それは「最適な状態」を指すわけであるが，氏は現在の日本社会を真に憂いていることをこの言葉に凝縮した。「こんなにも携帯電話が必要なのか」「そんなにも速く走る車が必要なのか」「こんなにも物に飽きることをどう考えるのか」といったことを語りながら，現在の日本社会は「自分が最適である状態」ではなく「社会が最適である状態」に無理やり個人を近づけていく状態をどんどん作り出しているとといたのである。

「社会全体が共通のオプティマムを持つことは考えられない。ここの人間が個々にそれこそ自分に良く合ったオプティマムを見つけていくことこそ大切なのではないだろうか」とは氏の言葉であるが，社会全体が加速度的にオプティマムの集団化を試みている状態を憂いた。そしてそういった現象にマスコミは深くかかわり，身体で感じる真実をどんどん歪め，仮想現実のような形で受け手である社会の構成